

ヨーロッパにおける博物館展示の現状

— オランダ・ライデン古代博物館の エジプト・コレクションを事例に —

和田 浩一郎

サイバー大学世界遺産学部・助手

キーワード：博物館展示，博物館倫理，古代エジプト，展示ラベル

はじめに

海外・国内の別なく，ここ 20 年あまりの間に博物館のあり方は随分かわってきたといえる。現代社会のなかで博物館に何ができるのか，何が求められているのかということが以前より真剣に考えられ，さまざまなアイデアが実践されるようになったからである。これまでヨーロッパの博物館は，研究者による利用がその役割の中心に据えられており，特に大学附属博物館などでは一般見学者の資料へのアクセシビリティに必ずしも十分な配慮が払われていなかったという（和田 2005：89）。しかし，そうした考え方がもはや通用しないことは博物館関係者の間では周知の事実であり，むしろ来館者側の視点に立った運営を進めていくことこそ重要であるということが強く認識されている。例えばアメリカ合衆国のスミソニアン自然史博物館は，展示方針に「観覧者を歓迎する」「展示で観覧者を見下してはならない」「観覧者の疑問を予想し，それに答えるようにする」といった事項を盛り込んでいるが（マックリー 2003：22-23），これは多くの博物館に当てはまる姿勢であると言える。

こうした認識の変化が明瞭になってきた要因のひとつは，博物館や美術館の独立採算化が進められたことにあるだろう。たとえばルーヴル美術館などフランスの主要な博物館・美術館は，文化施設の自律性を求めた法律の制定により，2002 年に文化施設公法人となった（グレフ 2007：181ff）。またイギリスの大英博物館も，出版事業などを行う大英博物館有限会社や大英博物館開発基金の設立で，運営資金の相当部分を調達している（林他 1999：26-27）。これらの大規模博物館では，国からの補助金が運営資金全体の中でまだ大きな割合を占めているものの，その額は減少傾向にあり，また補助金交付のために入場者の増大に結びつく方策を示すことも求められている。日本でも 2001 年 4 月に国立博物館などが独立行政法人化し，独自に収益を上げることが求められるようになったように，国ごとの

原稿受付日：2008 年 12 月 2 日

原稿受理日：2009 年 2 月 13 日

事情の違いはあったとしても、博物館・美術館への予算投入が縮小される傾向は世界的なものといえる。

このような動向の中で博物館がその原点に立ち戻り、展示方法の模索を進めたのは当然の流れであったといえよう。入場者の増大を図るためには、展示が多くの人に受け入れられる必要がある。そのため博物館は、現代社会のさまざまな問題、たとえばエスニシティ、性差やジェンダー、教育や経済の格差などと正面から向き合い、妥協点を見いだしながら展示の方針を検討していった。そして検討の成果を踏まえ、2000年前後にはヨーロッパの博物館で展示の更新が盛んに実施された。本稿ではそのような事例のひとつとして、オランダ・ライデン市にある国立古代博物館（Rijksmuseum van Oudheden：以下ライデン古代博物館と表記）の古代エジプトの展示を取り上げる。博物館がどのようにして多くの人々に魅力を感じてもらえる展示を展開しているのか、その工夫を見てみたいと思う。

欧米における古代エジプト展示の位置

ところで古代エジプトの展示は、現代のヨーロッパにおいてどのような位置を占め、どのように捉えられているのだろうか。2000年に大英博物館で実施された来館者の意識調査は、来館者の実に三分の一がエジプトの展示を目的として同博物館を訪れていたことを示した。さらに古代エジプトとエジプト人に対するイメージを尋ねる調査では、死、力、富、財宝、宗教、奴隷、秘密、神秘といった回答が寄せられたという（MacDonald 2003: 87-88）。こうしたアンケートの結果を見る限り、古代エジプトに対する一般の人々の関心の高さやイメージは、イギリスであろうと日本であろうと大差ないことが窺われる。

ロンドン大学付属のピートリ博物館（Petrie Museum of Egyptian Archaeology）館長のサリー・マクドナルド（S. MacDonald）は、古代エジプトに関するこうした一般的認識にはLost People, Lost in Time, Lost in Spaceという三つの重大な欠如が認められると指摘する。Lost Peopleはファラオと奴隷の間にいる、そして実際には人口の大半を占めていた民衆への認識の欠如、Lost in Timeは「ピラミッド」、「クレオパトラ」といったエジプト史のトピックはよく認識されている一方で、各トピックの新旧関係が無視されているという時間的認識の欠如、Lost in Spaceは古代エジプトの地図としてナイル川流域だけが示されがちな状況の中で、エジプトがアフリカ大陸の一角を占めているという空間的な認識が欠如していることを指す（MacDonald 2003: 95ff）。専門家からすると大きくバランスを欠いているこうした認識の形成には、さまざまなメディアが関わっているわけであるが、過去200年の間に博物館が示してきた展示の影響も無視できない一因であろう。例えば多く人は古代と現代のエジプトには大きな断絶があると考え、その結びつきにはほとんど関心を示さない。これは古代エジプトの展示がローマ時代までで区切られているという、博物館側の展示方針にも影響を受けている可能性が考えられる。本稿ではマクドナルドの視点を借りて、ライデン古代博物館の展示がバランスの取れた情報を提供できているかどうかについても見てみることにしたい。

ライデン古代博物館と展示の概要⁽¹⁾

ライデン古代博物館（写真1）は1818年、現在のオランダ王家の開祖であるウィレム1世によって設立された。同館の最初のコレクションは古代ギリシア・ローマの彫刻群で、これはライデン大学から寄贈されたものであった。古代エジプトのコレクションはギリシア人商人ジョヴァンニ・アナスタシーなど、著名な収集家のコレクションを買い上げることで19世紀前半に形成された。購入したコレクションには、サッカーラの墓域から出土した新王国時代の資料が多数含まれていた。そのことが契機となって、ライデン古代博物館とライデン大学は1970年代以降、サッカーラにおける考古学調査を実施している（Martin 1991）。



写真1 オランダ国立古代博物館（ライデン）正面
（筆者撮影）

さてライデン古代博物館は、1990年代後半から2001年にかけて展示室を順次刷新していく一大プロジェクトを実施した。この新しい展示の方針を決定するために、同博物館は各部門の学芸員を主要なメンバーとする、特別委員会を設置した。委員会のメンバーは他の博物館展示の分析をするなど検討を重ね、その結果を複数のテスト展示という形で具体化した。それぞれの展示は3、4個の展示ケースから構成される小規模なもので、異なるコンセプトに基づいていた。このテスト展示は一般の人々にも公開され、博物館は彼らに対するアンケート調査を実施することで、より多くの人々に歓迎される展示の在り方を探った。また一般の利用者へのリサーチと並行して専門家の意見も集められ、これら双方の声を統合して、最も適切と考えられる展示の方針が最終的に決定された。

ライデン古代博物館の新しいエジプト展示は、6つのセクションに分けられている。各セクションは古代エジプトの歴史の流れをおおまかに把握することができるように、それぞれ先王朝時代と初期王朝時代、古王国時代、中王国時代、新王国時代、第三中間期と末期王朝、ギリシア・ローマ時代というエジプト史の時代区分を説明する内容となっており、全体としては年代順の配列が採られている。各セクション内に配置されている展示ケースは、時代の説明を行うものと通時的な性格のトピックを説明するものとに分けられている。時代説明のケースの台座部分はオレンジ色、トピックのケースは青色と、内容による塗り分けが行われている。各トピックとそこに含まれる資料は通時的性格を持つものであるが、特に関係の深いセクションに配置する配慮が認められる。例えば古代エジプトの筆記術に関する展示は、古王国時代のセクションに含まれている。それは、この時代にピークを迎えたピラミッド建設という国家的事業の実現には、強固な中心集権体制が不可欠であり、中央集権体制の形成には読み書き能力に長けたエリート層の存在が密接に関わっていたか



写真2 アビドスのステラの展示（筆者撮影）



写真3 エリート層の部屋の再現展示（筆者撮影）

らである。

中王国時代のセクションに設けられているアビドスのオシリス信仰を伝える展示では、この神に捧げられたステラ（石碑）に自ら「語らせる」という、インタラクティブ性のある仕掛けが採用されている（写真2）。ステラの一群は展示台の上に垂直に立てられ、それらが安置された当時のイメージを伝えている。展示台前の低いフェンスにはステラの数だけ操作ボタンが並んでおり、ボタンを押すことで「語り」が始まる。該当のステラにスポットライトが当たり、ステラの奉納者の声が碑文の一部を読みあげるといった仕掛けである。エジプトの展示では珍しいこの手法は、先進的・実験的な展示を様々な展開していることで知られる、カナダのロイヤル・オンタリオ博物館の展示にヒントを得たものだという⁽²⁾。

新王国時代のセクションには、エリート層の部屋を再現した展示が設けられている（写真3）。この展示の近くにはファッションや娯楽に関する資料が配されており、全体として富裕層の生活がイメージできる一角となっている。他方で民衆の生活をイメージさせるような展示の工夫は認められない。古代エジプトの資料の多くは王やエリート層の埋葬から得られたものであり、それが展示の幅を制

約していることは博物館関係者の間でよく認識されている（MacDonald 2003: 89）。ライデン古代博物館の新王国時代の展示でも、資料が本来持っていたコンテキストから大きく逸脱しない方針が採られたものと思われる。

第3中間期と末期王朝のセクションでは、リビア人やギリシア人といった外国人の流入に焦点が当てられている。またヌビア人支配者「ブラック・ファラオ」に関する展示も、このセクションの一角を占めている。ここではエジプトが外界から隔絶された環境にあったのではなく、実際には活発な交流があったことが示されている。

同セクションの後半部分からギリシア・ローマ時代セクションの前半部分では、古代エジプト展示の核といえる埋葬習慣に関する資料が展開されている。その中で特に目につくのは、ミイラ製作のテントを再現した展示である（写真4）。この展示はミイラ製作の道

具類と容器類、ならびに幼い子供のミイラから構成されている。ミイラは裸の状態、脇腹には内臓を取り出した穴がぽっかりと開いている。裸のミイラの展示については、イギリスのマンチェスター大学附属博物館で一部の来館者から苦情があり、一時的にミイラを布で覆うという措置が採られたことがあった。しかしこうした措置に対して、専門家やハイ・アマチュアからは科学的な展示が感情的な意見に左右された、時代に逆行した行為だという批判の声が上がった (Telegraph 2008)。

考古学調査における遺体の取り扱いについては、1960年代以降のネイティブ・アメリカンやオーストラリアのアボリジニによる苦情の申し立てが引き金となって、とりわけ北米やオーストラリアではその処置に細心の注意が払われている (Pearson 1999: 173-177)。

また博物館展示においても、国際博物館会議 (ICOM) が1986年に制定した規約において、遺体が属する集団の倫理観や宗教観に十分配慮した取り扱いをするべきことが謳われている (ICOM 2007: 4.3)。ただし古代エジプト人の遺体の場合、同じ信仰を奉じる集団も血縁者も今日すでに存在しないため、どのような展示を行うかは博物館の判断に委ねられていることになる。ライデンではマンチェスターのような苦情の申し立てはないようだが、ミイラの展示方法をめぐる意見の対立は、博物館側が多様な見学者への対応を問われる問題として今後も持ち上がってくる可能性があるだろう。



写真4 ミイラ製作のテントの再現展示 (筆者撮影)

展示パネル

本節では展示資料に付されたラベルに注目してみたい。なぜならラベルは展示レイアウトと同様、博物館の展示コンセプトを判断する指標となり得るからである。ライデン古代博物館においてそれぞれの資料につけられたラベルには、資料の名称、100字未満の解説文、出土地、時代といった情報が記載されている。資料の名称は英語とオランダ語の併記になっているが、それ以外の記述はオランダ語となっているため、外国人がラベルから情報を得ることには困難がともなう。ただしヨーロッパの中規模の博物館では、受付でもらえるパンフレットを除いて母国語以外の表記を目にすることはまれであり、ライデン古代博物館が特別に不親切というわけではない。

各資料のラベル以外に、ライデン古代博物館は三種類のパネルを導入して、見学者が展示への理解を深められる工夫をしている。その第1は、各セクションの時代背景とトピッ

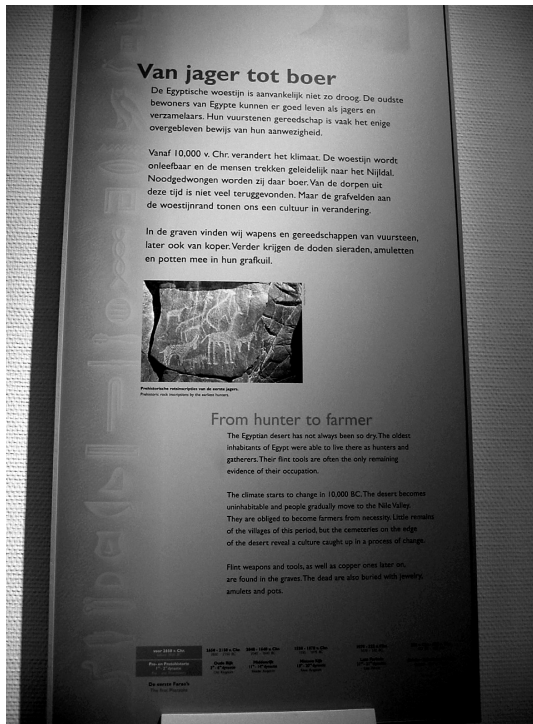


写真5 トピック解説パネル（筆者撮影）



写真6 ストーリー・テラーとそのパネル（筆者撮影）

クの紹介に用いられているパネルである。このパネルはオランダ語と英語の解説文，関連の写真や図，簡単な年表で構成されている（写真5）。これらのパネルは展示ケース同様，オレンジ色と青色の背景色が採用されている。言うまでもなく，オレンジ色のパネルは時代の展示，青色のパネルはトピックの展示にそれぞれ対応している。色によって提供している情報が分けられているという工夫は，見学者が興味のある情報にアクセスしやすいという考えのもとに採用されたと考えられる。ところが同博物館は，展示ケースやパネルの色分けの意味について，はっきりとした情報を展示室内で提示していない。そのため色分けの意味が来館者によって認識される可能性はかなり低いと推測され，見学者の学びへの貢献もあまり期待できそうにない。情報過多を嫌い，厳選した情報のみを提示しようとする博物館側の意向が，色分けに関する情報の不採用に結びついたのであろう。しかしこの措置は，結果として展示の意図を伝えるにうまくできていると言えるだろう。

第2のパネルは，「ストーリー・テラー（語り部）」のパネルである。ストーリー・テラーたちは各セクションの展示資料からひとりずつ，その時代を語らせるのに適した人物が選ばれている。すなわち農夫（先・初期王朝時代），書記（古王国時代），財務官（中王国時代），ハトシェプスト女王（新王国時代），ギリシア人移住者（末期王朝時代），エジプト人の少女（ギリシア・ローマ時代）が，当時の生活や社会の様子といったことを見学者に語りかけている。ストーリー・テラーとなっている展示資料の上には写真入のバナーが掛けられており，すぐ近くの壁にパネルが配置されている（写真6）。「ストーリー・テラー」パネルの採用は，見学者に各時代の状況をイメージしやすいようにという意図があったものと考えられるが，展示の中に過去の個人の視点を導入しようという，ポスト・プロセス

考古学的な試みと捉えることもできる。ただしこうした意図を鮮明に伝えていくのであれば、パネルという受動的な手法ではなく、音声としての「語り」を導入した方がより効果的だったとも言える。

第3のパネルは、“Did you know?”（「知ってた？」）である。これは特定の展示資料に関して、より詳細な情報を伝えるものである（写真7）。このパネルが紐付いている展示物は、各時代の出来事やそのセクションに含まれるトピックと特に結びついているものが選ばれている。

例えば新王国時代のセクションでは、主任彫刻師ハトイアイのステラが選ばれている。エジプトが一神教になったアマルナ時代に、伝統的な多神教の神々の記念物は大規模な迫害を受けた。ハトイアイはアマルナ時代の終焉後、被害を被ったそれら記念物の修復にあたった人物である。“Did you know?” パネルには、こうした該当資料の歴史的背景と詳しい解説が記載されている。このようなパネルが見学者の理解を深める助けとなることは疑いがない。その一方で、見学者自身が自由に展示と資料を解釈する機会を奪う存在になりうることもある。現代の博物館が、提示する情報の適切な量に注意を払っている所以である。

同博物館エジプト部長のラーフェン博士は、「エリート層によって形成された知的伝統である古代エジプト文化のメッセージを、どうすれば12歳の子供のために、100字以内で伝えることができるだろうか？」という言葉で、展示における情報提示の難しさを吐露している（Raven 2003: 106）。ラーフェン博士によると、ライデン古代博物館の新しい展示のラベルやパネルは、12歳の子供が理解できるように平易な単語を選び、100～150字の長さに収まるような分量にしたとのことである。どうしても避けることのできない専門用語、たとえばステラ、スカラベ、マスタバといった単語はイタリック体で表記され、単語の後ろに短い解説文がつけられている。

おわりに

以上、ライデン古代博物館のエジプト・コレクションを事例に、ヨーロッパにおける新しい博物館展示の様子を概観してみた。先に紹介したマクドナルドによる三つの欠如（Lost People, Lost in Time, Lost in Space）から同博物館の展示を評価してみると、まず民衆の存在については明瞭な形で展示に現れてこないものの、ストーリー・テラーとして幅広い階層・社会背景の人物を採用する意図は認められた。また展示全体の傾向として、王の存在よりも社会や文化、宗教などに主眼を置いていることが窺われた。時間的推移とよく知られたトピックとの結びつきについては、各セクションとトピックの組み合わせによって独自の工夫が実践されていると見なすことができる。またローマ時代の展示パ



写真7 ‘Do you know?’ パネル（筆者撮影）

ネルで、キリスト教徒が現在に至るまでエジプトで存続していることに言及するなど、古代以降の連続性にも目配りしていることも窺われた。エジプトの地理的位置づけについては、伝統的な地図が採用されているのみで、この点は問題意識に上っていなかった可能性がある。ただし展示の後半では、多くの外国人がエジプト国内に居住していたことが紹介され、古代における国際交流についてはある程度の知見が得られるようになっている。このような結果を見る限り、ライデン古代博物館は展示の刷新に当たって伝統的な展示の弊害を除くべく努力をし、かなりの部分でそれを実践していると言っていることができるだろう。

どんなにテクノロジーの発達が仮想現実世界をリアルなものにしても、現実の「もの」が持つ存在感や説得力を越えることはできない。そこにこそ博物館・美術館が存在する意義があるのは、疑いがないところであろう。しかし同時に、博物館・美術館はそうした「もの」をどのように取捨選択し、どのように見せるかということに重大な責任を負っている。ひとたび展示が行われれば、そこには一定の権威や正当性が生まれる。その展示が多くの人目を集めれば、それだけ影響力は大きくなる。そのためアメリカ・スミソニアン航空宇宙博物館における B-29 “エノラ・ゲイ” の展示 (Thelen 1995) や、カナダの戦争博物館でのドイツ爆撃機の展示 (Financial Post 2007) のように、当事者・関係者のあいだで大きな論争やクレーム合戦が起こり、結果として展示のしかたを変更しなければならない場合も起こってくる。本稿で紹介したマンチェスター大学附属博物館におけるミイラの展示に対する反応も、こうした事例のひとつであることは言うまでもない。

誰もが満足する展示の実現は、人々の多様化が認識された現代社会では極めて難しい。それでも博物館・美術館は、人々の「知」を形成する場として、その多様性を受け入れられるように取り組んでいく必要がある。その意味で博物館・美術館は、複雑化する現代社会の諸問題に対する実践の場という役割も負ってきていると言えるかもしれない。

注

- (1) ライデン古代博物館の沿革と新展示に関する情報は、2005年3月に同博物館のエジプト部長マーテルテン・ラーフェン (Maarten J. Raven) 博士から直接うかがったものである。また館内の撮影とその使用についても、博士から許可をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。
- (2) 入場者が資料に直接働きかけるこのような展示は、ハンズ・オン (Hands-on) 展示と呼ばれる。このような展示手法は、その導入に当たって、資料の解釈・説明の効果的手法か、利用者の増加は見込めるか、資料をハンズ・オン展示に利用してもいいのか、導入することで展示の性格を変えてしまわないか、などの考慮を行う必要があるとされる (コールトン 2000: 58-60)。つまり、ただ「楽しい」という反応が得られるだけでは、他のアミューズメント施設と何ら変わるところがなく、導入する意味がないということである。

引用文献

1. Financial Post 2007: “Museum to change bomber exhibit”, <http://www.financialpost.com/story.html?id=d2a2cbfa-59b0-4275-b18b-87883fb456d8&k=8217> (2008年11月27日アクセス)
2. ICOM 2007: “ICOM Code of Ethics for Museums”, ICOM, <http://icom.museum/ethics.html#section4> (2008年11月25日アクセス)
3. MacDonald, S. 2003: “Lost in Time and Space: Ancient Egypt in Museums”, in MacDonald, S.

- and M. Rice eds., *Consuming Ancient Egypt*, London, pp. 87-99.
4. Martin, G. T. 1991: *The Hidden Tombs of Memphis*, London.
 5. Telegraph 2008: “‘Naked’ mummies covered after complaints”, <http://www.telegraph.co.uk/news/uknews/2000248/‘Naked’-mummies-covered-after-complaints.html> (2008年10月9日アクセス)
 6. Thelen, D. 1995: “History after the Enola Gay Controversy: An Introduction”, *The Journal of American History* 82-3, pp. 1029-1035.
 7. Pearson, M. P. 1999: *The Archaeology of Death and Burial*, Gloucestershire.
 8. Raven, M. J. 2003: “Response to R. Schultz”, in Hawass, Z. A. ed., *Egyptology at the Dawn of the Twenty-First Century: Proceedings of Eighth International Congress of Egyptologists*, Cairo 2000, Cairo, pp. 105-106.
 9. グレフ, X. 2007: (垣内恵美子監訳)『フランスの文化政策 — 芸術作品の創造と文化的実践』, 水曜社.
 10. コールトン, T. 2000: (染川香澄他訳)『ハンズ・オンとこれからの博物館』, 東海大学出版
 11. マックリー, K. 2003: (井島真知, 芦谷美奈子訳)『博物館をみせる 人々のための展示プランニング』, 玉川大学出版部
 12. 林容子, 軍司泰則, 清水陽一, 清水敏男, 桜井武 1999: 「海外の国立博物館・美術館の「民営化度」最新データ」, 『ミュージアムマガジン ドーム』第46号, pp. 4-29.
 13. 和田浩一郎 2005: 「学会報告: “Museums and the making of Egyptology”」, 『エジプト学研究』第13号, pp. 87-93.